

れなかった」人びと、そしてかれとちがって名を残すことがないままこの地を去り、あるいはこの地で死んでいった人びとの存在に思いをはせるべきだったのかもしれない。「なれなかった」理由はさまざまだろう。酔っ払いに殺された、子供がいなかった、畑や家畜を手に入れられなかった…。ぼくは「なった」人びとのことばと「なれなかった」人びとの理由をともに考えることで、帰属にまつわるかれらの力学をより深く知ることができたのかもしれない。すくなくともそこには「不条理さ」だけで片付けることのできない、「役人の書類審査」ともその対極にある「柔軟さ」とも異なる論理があるのだと思う。それはいまのところ、新たな思い入れでしかないが。

昼過ぎになると木陰で寝てばかりいたぼくは、村人から「ロニャガトロロの男」と呼ば

れるようになった。もっとも、村の内外から人びとが集う木陰で無為にすごした時間は必ずしもムダではなかった。調査のためにほかの村を訪問したときに、ぼくは見知らぬ男たちからよく声をかけられた。「おまえのこと知ってるよ、このまえロニャガトロロで寝たよな」。このひとことで緊張が解けて話が始まる。自分の存在がとりあえず相手に知られていることは、調査を進めていくうえでとても大切なことだ。その点においてぼくは運がよかった。たまたま「発見」したうつくしいニエキーキ村の木陰に体を横たえているだけで、「ダサネッチのやり方を学ぶ男／白人」の存在をおおくの人びとに知ってもらうことができたからだ。

ロニャガトロロは、ぼくにすこしのことを考えるきっかけを与えてくれた人であり、たくさんの人と出会うきっかけを与えてくれた木陰である。

オヴァンボの昆虫食と幻のおかず

藤 岡 悠一郎*

フィールドに滞在しはじめて1ヵ月ほどたったある日、私は村の青年と一緒に歩きながら、さっき鳴いていたセミの話をしていた。ここはアフリカ大陸の南西にあるナミビ

ア共和国の北部の村、ウウクワングラ村である。この村に暮らしている民族はオヴァンボ(Ovambo)という。彼らは、年間平均降水量が400-500ミリメートル程度と農耕には厳し

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

い気候下で、ウシやヤギを飼育しながら乾燥に強いトウジンビエを主に栽培している。乾季も終わりに近づく10月半ば、村ではあちらこちらから「ジーーーー」というセミの低い鳴き声が聞こえてくる。彼との雑談の話題は、「こんな乾いた季節にセミは何を食べているのか？」というようなことだった。カイタという名の青年(19)は「セミはアカシアの木の汁をすうんだ」と教科書的な答えを返してきた。だが、そこから話題は思わぬ方向に展開した。「ところで日本人はセミを食べるのかい?」「ぼくは食べたことないけど、君たちは食べるの?」もともと昆虫が好きであった私は、どんな昆虫をどうやって食べるのか、大きな興味がわいてきた。フィールドで植物の調査に着手していた私は、このことを契機として昆虫を食用とする彼らの食文化(昆虫食)に魅かれ、次第にのめりこんでいくこととなるのである。

昆虫食は世界各地でみられ、アフリカでは特に中部・南部に広く分布し、イモムシ・ケムシの類やバッタ、シロアリ、ミツバチなどが食用とされている。日本でもハチノコやイナゴなどを食用とする食文化が各地に存在し、実はセミを食用とする地域もあるようだ[三橋 1997]。しかし、日本では昆虫食というと、日常の食事というよりも、どちらかといえば「ゲテモノ」としての扱いをうけることの方が多いだろう。

雨季に入った12月、私は村人に昆虫食のことを本格的に聞いてみようと思うようになった。カイタ青年の情報によると、オヴァンボは11種類の昆虫を食用とするそうだ。

そのうち5種類は蛾の幼虫であるイモムシの類で、そのほかにはコガネムシの幼虫、ノコギリカメムシ、タマムシ、セミ、シロアリがある。イモムシ5種のうち、ヤママユガの幼虫2種は、モパネ(*Colophospermum mopane*)というマメ科の半落葉高木を食草とするため、モパネワームという英名で知られている。モパネ林が広く分布するナミビア北部では、モパネワームを食用する人が多く、町のマーケットでは販売もされている。しかし、ウウクワングラ村では、モパネワームよりもドクガの幼虫であるオカナンゴレ(*Okanangole*)の方が好まれるようだ。若干固いモパネワームや牛肉などと異なり、脂がのってやわらかい点がいいという。このイモムシはマメ科の落葉低木であるアカシア(*Acacia arenaria*)を食草とする。ウウクワングラ村では毎年のように発生し、かつてはたくさん採れたそうだが、最近ではほとんど発生しなくなった。

モパネワームもオカナンゴレも調理法はほとんど同じである。まず、少量の水と塩



写真 1 丸々と太ったオマヘンコエ(モパネワームの1種)



写真 2 火を通して乾燥させたオマヘンコエ
すぐに食べない場合はこの状態で保存される。



写真 3 オシフィマ（トウジンビエ粉の練り粥）
とオマヘンコエ
オヴァンボのある日の夕食。

を素焼のつぼに入れて煮立て、イモムシを入れる。そして水が完全に蒸発し、乾燥したらできあがりである。これをオヴァンボの主食であるオシフィマ（Oshifima：トウジンビエ粉の練り粥）のおかずとして食べるのである。最近では乾燥させたイモムシを再び少量の水と市販の固形スープと一緒に煮込み、煮汁とともに食べる方法もあるそうだ。カイトはオカナンゴレが大好きで、「おかずのなかでは最もうまい」という。町で売られるよう

になったピザも彼の好物のひとつであるが、「ピザの上にあのイモムシをのせて食べたら最高だろうな」とも語った。彼一推しのイモムシ、オカナンゴレをまだ食べたことのなかった私は、その感覚をまったく共有できなかった。だが、昆虫の味の評価がオヴァンボの社会では意外と高いのではないかと感じていた。「これはひょっとしたら昆虫をかなりの頻度で食べているのではないだろうか？」という期待をひそかに抱きつつ。

ある日、私はウウクワングラ村生まれのアセリさん（60歳前後）の家を訪ねた。その女性は学校から帰ってきた子供たちと一緒に木陰で休んでいた。私が「役にも立たないこと」をいろいろ調べているのを知っているので、その日も「今日は何が知りたいの？」と招いてくれた。私はすかさず「食べられる虫について知りたい。オヴァンボの人たちはどんな虫を食べるのですか？」という疑問を投げかけてみた。するとどうだろう、そのおばさんとその周りにいた子供たちが大笑いしたのである。ちょっとした緊張につつまれていたその場が一気に和やかなものとなったのは幸いだった。しかし、私にはなぜ笑われたのか、その意味がわからなかった。というのも、今までほかの質問をした際にはそのような反応が返ってきたことがなかったからである。ある子供は、笑いながら「わー」と奇声を発していた。その後、おばさんは私の質問に丁寧に答えてくれたので、そのときはその「笑い」に対して特に深く考えることはなかった。しかし、そのほかの家で尋ねたときも、同じような反応にでくわすことがしばしば



写真 4 カイタ青年の描いた「幻のイモムシ」、オカナンゴレ

ばあった。

その「笑い」はなぜ起こったのだろうか？「ゲテモノ食い」というような、昆虫を食べる人を侮蔑的にみる意識があるのだろうか？

一部の昆虫に関しては、それを食べる人に対してそのような言い回しがされることがある。たとえば、「エエサクラシャ(eesakulatha: シロアリ)を食べるのは〇〇だ」「エエサクラシャは〇〇の食べ物である」といった具合である。この場合、〇〇にはオヴァンボを構成するサブグループの名前が入る場合が多い。しかし、シロアリなど特定の種類の昆虫以外では、そのような言い回しがされることを聞いたことはない。私が滞在していた雨季の間にほぼすべての世帯がなんらかの昆虫を食し、その大笑いした世帯でも数回食べていたことがあとでわかった。しかも、その食べ方は他の人に隠れてこそこそ食べるというようなものではなく、場合によっては近所の人と一緒に食べることもあった。この社会では、昆虫は「ゲテモノ」ではなく、日常の「おかず」のひとつなのである。オヴァンボ

の言葉でおかずはオムウェレロ (Omwelelo) というが、昆虫もその一品とされる。たとえば、「好きなオムウェレロは何？」と聞くと、魚、肉、ミルクなどと並んでオカナンゴレやエグング (egungu: モパネワーム)、エンダンガリ (endangali: コガネムシの幼虫) などがあげられる。とはいっても、その食用回数には世帯差が大きく、昆虫食には世帯あるいは個人の嗜好の差が強くあらわれるようだ。やはり昆虫を食べる人は変わり者で、昆虫食の質問をした私もそのように思われたのだろうか？ また、笑われた理由としてもうひとつ考えられるのは、外国人である私が昆虫のような食べ物を知っていたことに驚いたということである。しかし、どうもニュアンスが違う気がするのである。確かに、昆虫食以外のものでも、「おまえよくそんなことを知ってるな」という笑いが生まれることはある。しかし、昆虫の時のような手放しの大笑いではなく、そのときはむしろ感心の気持ちを含む笑いであった気がするのだ。

調査も終盤に差しかかってきた2月、サカリヤ氏 (62歳) と雑談をしていた時に、次のような話を聞く機会があった。「オカナンゴレは実にうまかった。毎年雨季になると決まってあらわれ、特に雨の少ない旱魃の年に多く発生したものだ。あれを採るときに毛が手に刺さってかゆくなったけど、それでも採ったものだ」と語ってくれた。またアビネル氏 (70歳前後) は、「オカナンゴレを煮ているときに牛乳の脂肪分を少しいれると、香ばしいかおりがするんだ」と話し、それがいかにすばらしいものであったかを語ってく

れた。また、「イモムシたちはアカシアの葉を食べるので、大量に発生したときは村のアカシアが丸坊主にされ、ヤギの餌がなくなってしまうこともあった」という。しかし、そのような思い出話とともに、2人とも「ここ10年ほどはまったくみられなくなってしまった」ことを強調する。その理由として、アビネル氏はアカシアの木が減少した点を指摘する。「人が多くなり、アカシアを切って畑にしてしまったので、オカナンゴレがいなくなってしまった」という。そこからの話題は地域の自然環境がいかにかわってしまったか、ということに移った。ウウクワングラ村のあるナミビア北部は、雨季に洪水の押し寄せる季節河川（現地語でオシャナ：Oshana）が何本も走っている。村のすぐ横にもオシャナがあるが、昔はそこにたびたび水が流れ、そのすぐわきにあるアビネル氏の家もしばしば水に浸かったそうである。その洪水は畑に水を与え、そこに生えている樹木を育む大切な機会であったが、現在ではそれがほとんどなくなってしまったという。

このような自然環境の変化と同時に、オヴァンボの生活様式も急速に変化しつつある。1990年に独立を迎えたナミビアは、観光業の発達などにもともなって、住民の生活水準もよくなりつつある。ウウクワングラ村から10キロメートルほど東にある地方都市のオシャカティには、南アフリカ資本のスーパーマーケットが並び、村人もしばしば食材を買いに行く。そのため、村人の食卓には購

入で得たパンや米などの食材が目につくようになった。また、住居の様式が従来の樹木を使ったものからトタンなどの材を使ったものへと移り変わり、さらには携帯電話が次第に普及しはじめるなど、近代化の波がさまざまな面で押し寄せつつある。

オカナンゴレの発生がなくなった現在、オカナンゴレがおかずの一品になっていたという事実は過去のものとして忘れ去られつつあり、また生活様式の移り変わりはそれがおかずの一品になるという意識すらも変えつつある。かつてほとんどの世帯でおかずとして利用されていたオカナンゴレは、現在ではもはや「幻のおかず」なのである。もちろん、その一方で一部の昆虫は現在も「おかず」として用いられているのだが、昆虫の利用量全体は減少傾向にある。聞取りの際に「笑い」が生じたのは、いまだきそんな「古い」おかずに外国人の私が注目することに違和感を覚えたためではないだろうか？ しかし、私にはその笑いのなかに、どこことなくもの悲しさを感じて仕方なかったのだ。年長者の昆虫食に関する語りそのものからは、日常的なおかずの一品としての重要性や昆虫に対する深い思い入れが伝わってくる。「本当にそれでいいのだろうか？」という微かな戸惑いが、笑いのあとの静けさから感じられるのであった。

引用文献

三橋 淳. 1997. 『虫を食べる人びと』平凡社.